

ザ・タイガースでピーと呼ばれた男 ロング・グッバイのあとで

瞳みのる



文：持田吉彦 撮影：張穎

瞳は激しく動揺した。「自分の手でメンバーをまとめられたのではないか。妥協した自分がいたのではないか」と、瞳は自責の念に囚われた。そして、「もう二度と後悔したくない。自分で決めたことは絶対に貫き通す」と決めた。

この覚悟があったから、瞳は30年以上に亘り、地味な教師生活を続けてきたのだろう。メディアに出ることを一切拒否して。そして自分の息子にさえも元タイガースであることを一言も口に出さずに。

瞳に向けて作られた楽曲
沢田の謙虚さに心打たれる



出版記念パーティーにて。
左から岸部一徳、瞳みのる、沢田研二、森本太郎

瞳はミュージシャンとして、社会に対するメッセージを送りたかったに違いない。しかしプロダクションとしては、ミュージシャンといえどもビジネスツールであり、ファンが望むアイドル路線を強いた。虚飾に彩られ、自己主張は否定され、メンバー個々の気持ち一つでなくなったことに

武道館での解散コンサートを終えると、忽然と大衆の前から姿を消し、高校教師として寡黙に生きてきた男がいる。しかも40年近くも昔の仲間と一度も会うことなしに。意地、わだかまり、夢の欠片……。長く果てしない歳月を乗り越えて、やっと氷解した彼の心。会わずとも、道は違えども、お互いに刺激し合いながら、切磋琢磨していたと語る男の半生。（文中敬称略）

栄光の頂点にしながら受験
過去を封印し、高校で教鞭

人間とはこんなにも頑なになれるものなのか。そんなことを思い起こさせる人物が北京にいる。瞳みのる（本名：人見豊）64歳。1967年～1971年、同じ学校の同級生らとともにスターダムの頂点の昇り詰め、日本中に旋風を巻き起こしたバンドのメンバーだ。バンド解散後、芸能界はもとより、メディアに露出することも、芸能界で活躍する元メンバーたちとの接触も40年近くに亘り一切拒否し続けてきた。そのバンドとは、『ザ・タイガース』。G（グループサウンズ）最大の人気を誇ったバンドだ。瞳は『ピー』の愛称で親しまれ、ドラマスを担当。ボーカルの沢田研二に次ぐ人気ドラマーだった。

タイガースは67年のデビュー以降、瞬く間に時代の寵児となり、その人気は日本中を席巻した。一世を風靡したG S旋風の火付け

役もタイガースなら、終焉に導いたのもまた、タイガース。所属プロダクションは、大方のファンが望むアイドル路線を堅持。しかしこの方針をめぐってメンバーの意見が食い違い、バンドの求心力は次第に低下していった。そして71年、タイガースは根強い人気を保ちながらも、武道館での解散コンサートでその輝かしい歴史に終止符を打った。

この日を最後に瞳は一人、京都へ戻り、かつて学んだ定時制高校の4年生に復学し、大学進学を志した。猛勉強の末、1年で慶応大学文学部に合格。修士課程まで進み、卒業後は慶応義塾高校の国語や中国語の教師として30年以上に亘り教鞭をとった。そして上述のようにタイガース時代の過去を封印し続けた。

5人揃って目指した夢破れ
京都に戻って出直したい

な ぜ瞳は40年近くも過去の自分を封印してきたのか。それはもしかしたら、戦争で辛い体験した人々がその当時のことを話したがるのと同じでいるのかもしれない。また、ビートルズのジョン・レノンとポール・マッカートニーが一切の接触を断っていたのと通じるところがあるのかもしれない。

タイガースは、瞳を中心に、彼の小学校からの同級生である森本太郎（ギター）、中学校の同級生である岸部一徳（ベース）、高

のは森本。「いきなり太郎と出くわした。ぼくは予め心の準備をしていたせいか、動揺はなかったけど、彼はよくと一言三言、言葉之交わしただけで、もう泣いていた」。

普通では考えられないような強烈な体験の中で陥ったネガティブな人間関係を修復し、心が打ち解けるまでには、40年近くも歳月が必要だったのだろう。長い、長い風雪が瞳の心を和ませていった。「飲み始めて2時間過ぎた頃には、37年ぶりの再会が嘘のように、バンド結成前の友だちに戻っていた。5時間以上も杯を重ね、最後にみんなで一緒に写真を撮った。その写真を後で見たら、ぼくらの表情は、素顔の少年時代に戻っていた。ぼくらの『長い別れ』がようやく終わりのときを迎えた」。

瞳は昨年3月、教職を辞し、北京に居を移した。大学時代から続けている中国古典文学の研究とともに、明治期の文部省唱歌や中国現代音楽の研究に打ち込んでいる。そして、中国語と日本語での作詞や、作曲をし、レコーディングするなど、音楽活動も始めた。

タイガース時代までが第一の人生なら、高校教師時代が第二の人生、そして瞳は今、

校の後輩である加橋かつみ（ギター・ボーカル）、そしてバンド活動中に知り合った沢田研二が参加して66年に結成。芸能プロダクションが意図的にタレントを寄せ集めてつくったバンドではなく、京都在住の友人同士が組んだ、ピュアにロックを志向するバンド。日本のロックシーンにおける先駆的なバンドだったと言ってもいい。

したがって、「互いに自己主張して譲らず、常に喧嘩が絶えなかった」と瞳は言う。解散の2年前、人気絶頂を迎えながら、加橋かつみが脱退。瞳は、「5人揃って世界一を目指していた多くの夢は、かつみが脱退したことで、事実上破れた。その後は、青春の貴重な時間を浪費しているだけなのでは」と思うようになった。

一方で瞳は、タイガースへの執着もあった。「京都時代の一緒にいるだけで夢のように楽しかった日々のように、バンドを元の戻したいという願望も完全には消えていなかった。そして自分たちでつくったバンドを他人に潰されたくないという思いも強く、もう一度出直したいと思っていた」。誰からもコントロールされることのない、完全自立のバンドを夢見て。

自分は妥協したのだろうか
自らの決断を貫き通す覚悟

時 代は動いていた。ベトナム戦争泥沼化による反戦運

第一と第二の人生を融合した第三の人生を歩んでいる。今年9月から行なわれる沢田研二の全国ツアーに瞳は、岸部一徳、森本太郎と共に参加することが決まった。このコンサートは、タイガース時代のナンバーだけを演奏する。つまり事実上、ザ・タイガース再結成コンサートが実現することになった。

◀「仰げば尊し」瞳みのるバージョンをレコーディング。新進気鋭の中国人アーティスト(歌手・女優・作家)、田原をフィーチャー
▼スタジオで田原との打ち合わせ



ザ・タイガースでピーと呼ばれた男
『ロング・グッバイのあとで』

瞳みのる 著
集英社 定価1260円
(ISBN978-4-08-780595-6)